

新しい生活の中で

日置中 三年

角野 桃子



は、みんなそれぞれ個性的な人達でした。けれども、冷たくも、こわくもなく、やさしい人達ばかりでした。私のそれまでいっていた悪いイメージは、良いイメージに変わったのです。

ただ一つ、東京で暮らしていく中で、困った事がありました。それは、言葉です。方言がでたり、なまりがでてしまったりと、友達に笑われたりもしました。笑われて以来、私はしゃべるのがいやでいやでたまりませんでした。「えらい。」は、向こうでは「つかれた。」、「やめさん。」は、向こうでは「やめなよ。」というように、山口では何気なく使っていた言葉は、東京では、笑いのたねにかなりまんでした。

五年生になると同時に、沖縄から転校生が来ました。その子は、私より方言やなまりが強く、クラスのみんなが笑いました。しかし、その子は、恥ずかしいなんて思っていないで、むしろ、堂々としていました。私はその子に会って、方言のどこが恥ずかしいのだろうか、別になまってても、いいんじゃないかって思えるようになりました。そう思うと同時に、私は、積

小学校四年の三学期、私は、ここ山口から、東京へ引っ越しました。山口ではあたり前だった事が、東京では、すべて変わりました。少しいやな事もありませんが、今では、東京で生活できて、よかったです。と思います。なぜなら、たくさんさんの事が、学べたからです。それに、山口とは違った生活が味わえたからです。

極的に話をするようになりました。そんな私に、友達も、「明るくなつたね。」とか、「はじめはおとなしい子かと思ってた。」と言ってくれるようになりました。私は、東京の地で、言葉について、考えることが出来たのです。

当時の私のクラス五年二組は、ケンカのたえないクラスでした。口ゲンカや、ときにはなぐり合いもありました。けれども、その分仲なおりの数も多かったと思います。ふり返ってみると、そこにすんでいる人達は、あたたかい人達ばかりだったと思います。クラスのなかで一番尊敬していた子がいました。その子は、同じ班の子で、やさしい子でした。言いたい事は、ハキハキ言って、正直で、明るくて、私の大好きな友人でした。私が男子に、いじめられていると、助けてくれたのもその子でした。私は、大切な一言を、伝える事のないまま山口へ帰りました。伝えたい言葉は、ありがとうでした。このたった一言を伝える事ができなかつた私は、今でも、こうかいています。ただ、その人のやさしさに、ふれる事ができ、私の中で、プラスになりました。

社会を明るくする運動によせて



日置町保護司会 藤井 秀夫

私は、東京へ行つて、自分自身が変わった気がしました。東京で生活できて、本当に良かったと思います。東京に対しての、悪いイメージも良いイメージに変わり、今まで述べてきたように、たくさんの方の事を考えたり、学ぶ事が出来ました。

東京から帰ってきて、よく聞かれた質問は、東京と山口、どっちが好きかっていうもの

今年も社会を明るくする運動が実施されます。保護司会では例年のように町内各所にポスターを掲示し、ウチワ等配布し明るい町づくりを目指して居る所でございます。近年非行の一般化が進み資質面、環境面での問題が比較的少ない少年にも非行は広が

りつつあります。従来からの遊び型と言われる軽微な窃盗や、いじめ問題、一方では社会の耳目を集める様な凶悪な事件もみられます。この様な状況は地域社会における人間関係の希薄化に依る対話の欠如など少年をめぐる社会環境の悪化に依る所が少なくないと思われまふ。これらに対処するためには、地域住民の理解と参加の下、家庭、学校、職場、及び地域社会が一体となつて失われつつある社会的連帯感をよみがえらせ犯罪や非行を誘発しない様な社会づくりを進めると共に、非行に陥つた少年の更生を図るため